

白木峰  
高原

# こどもの城

どわ~の (どきどき、わくわく、のびのび)





## はじめに

「ここに来ると、いつも嬉しい。皆さんが笑顔だから。」

30万人の来館者記念セレモニーの日に私が述べた感想です。

こどもの城は、子どもたちが生きる力を培うことを目的にして、平成21年3月20日に開館しました。3年目を迎え、これまで約35万人という多くの来館者を受け入れることができました。

本市は、「ひとが輝く創造都市・諫早」を将来都市像とし、こどもの城をその土台づくりプロジェクトの一つとして位置づけ、実現に取り組んでまいりました。

こどもの城は、教育の視点、児童福祉の視点、地域づくりの視点など様々な角度から見られる施策です。白木峰高原の一角に位置し、児童生徒や親向けの専門的なプログラムを実施していることは、青少年教育施設のようにもあります。また、荒天時でも屋内で遊び、学べる建物は、大型の児童館のようにもあります。さらには、PTAや子ども会などの団体と連携した事業は、地域づくりと大いに関係しています。これまで、このような事業の事例は少ないためか、市内外からも注目度が高くなってきております。

なお、こどもの城が、ここまである程度の成果をあげることができたのは、よき利用者として、あるいはボランティアとして活躍される市民参加力があったからであると感じております。

今後も、子育てや教育に関して多様な相談を受けるなど、人々の抱える悩みや問題に市民とともに正面から向き合い、実践を積み重ねる中で、市民の思いを感じながら、必要な取組について研究しチャレンジしてまいります。

平成24年3月

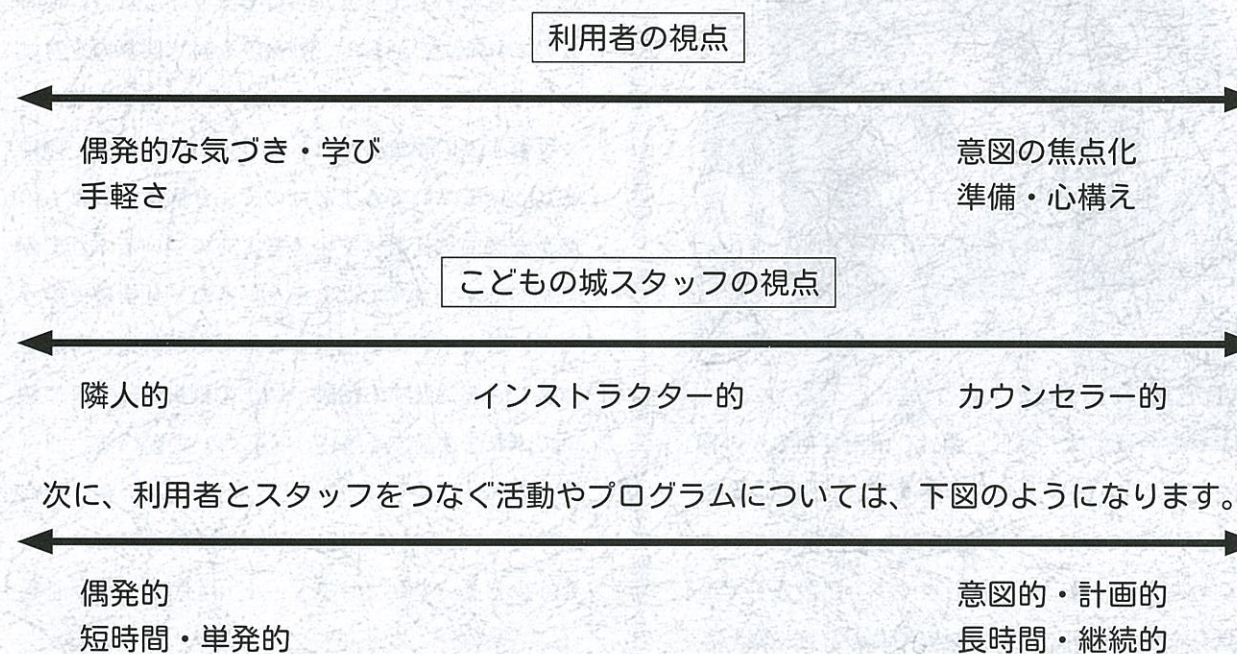
諫早市長 宮本明雄

## ～ふらっと来れば遊ぶところ ねらって来れば深いところ～

今回の報告書では、こどもの城が提供する活動やプログラムについて、利用される方の視点と、こどもの城から提供する視点を折りまぜて、ふれてみたいと思います。

まず、理解していただきたいのは、こどもの城を利用する際は、①申込みなしで利用する、②申し込んで利用するという2つの方法があるということです。図にすると、下図のようになります。

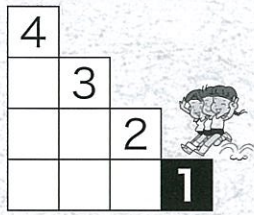
申込み不要		申込み・打合せが必要	
遊具などで遊ぶ	催しに参加する	事前に申し込んで催しに参加する	事前に打ち合わせてオリジナルの活動を創造する



いずれの活動やプログラムも、こどもの城としては、4段階があるにとらえています。

Re Creational	レクリエーション的
Educational	学習的・教育的
Development	創造的
Re Development	修復的・再創造的

次ページからは、この4段階についてふれてみます。



# 第一段階 Re Creational

気持ちの解放や楽しさを追及して活動する場合の  
ことについてふれます。



## 他者とふれあう催し

こどもの城では、毎日、屋外と屋内で何らかの催しを実施しています。申込みをせずに、来館された方々が自由に参加できる活動も多く提供しています。もちろん、催しに参加しなくても、設置している遊具などで自由に遊んで、気持ちの解放や楽しさを味わうこともできるでしょう。

しかしながら、こどもの城は子どもたちの生きる力を培うことを目的とした施設です。確かに、木の砂場や10mの壁など、こどもの城にしか設置していない大型遊具もありますが、諫早市内には、個人でも利用でき、子どもたち向けの遊具がある素晴らしい場所は他にもたくさんあります。

ここで注目したいのは、ボランティアやスタッフ、そして他の利用者という他人の存在です。私たちは、人として社会の中で生きています。人として生まれた子どもたちも、家族からはじまり、しだいに他者とのふれあいを通して、社会性や対人関係力を身につけていくものだと考えられます。

これまでの報告書では、そういったふれあいの中身についてふれてきましたので、今回は、こどもの城が意図的に仕掛けている考え方についてふれてみます。まず、本章では、そういった「仕掛け」のうちで、最も手軽に参加できる催しを題材に、解放感や楽しさを追及する活動(図①の網掛け部分)についてふれます。

その前に、提供する側の基本的な考え方について、もう少し……



“楽しむ”を手伝う

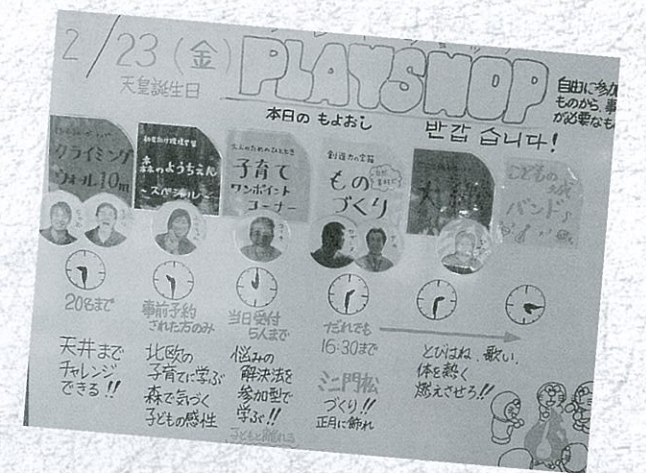
## “楽しませる”でなく、 “楽しむ”ことを手伝う

日本には、諫早市のほかにも、同名・同種の児童施設が存在します。今年度、神戸にある施設(「こべっこランド」)で、青山(東京)にある「こどもの城」、松山(愛媛)にある「こどもの城」と、諫早市こどもの城のボランティアやスタッフの方々が交流会をしながらイベントを行いました。そこに参加したボランティアの佐々木三紀子さんは語ります。「諫早市こどもの城は、他の施設と比較して、催しを実施する際の考え方に違いがあるように感じました。今回、他の施設は、催しの内容や実施方法について時間を割き、準備をしていたように感じます。一方、私たちは、参加者への対応を中心に据えて、内容は参加した方の動きによって柔軟に対応・変化していくという考え方でした。したがって、準備段階では、他の施設が用具・教材を作成している傍らで、私たちは会場や周辺地域の雰囲気を感じたり、どんな年齢層がどんな家族構成で来て、どのように動くことが予想されるのかなどの情報を収集したりしました。どちらがいいということではありませんが、他の施設のボランティアやスタッフの方々は、私たちのやり方を参考にされたようでした。私自身、カウンセリング研修やファシリテーション研修(諫早市こどもの城のボランティア等養成事業)に参加して、

自分が活動するうえで大切にしている考え方です。」

かつて、Carl Rogers(カール・ロジャース)という人が、カウンセリングという概念を広めたと言われます。その根幹が、Client Centered Approach(来談者中心、またはPerson Centered Approach=人中心)という考え方です。

こどもの城では、ロジャースに近い考え方で活動やプログラムを仕掛けています。言い換えるならば、提供する側が“楽しませる”のでなく、利用者・参加者が“楽しむ”ことを手伝うのです。こどもの城は、市民とともにつくる施設ですので、今後もこの考え方を大切にしていきたいと思います。

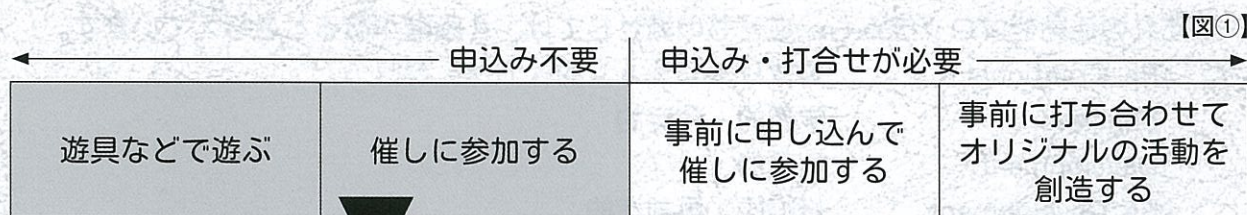


その日の催しは掲示板に手書き

## ボク、カブトムシ捕りたい!

学校や幼稚園・保育園などの夏休み期間中には、屋外での「虫捕り」を実施しています。図②中では、屋外の動的な催し(右上の欄)の一つになります。

この催しは、スタッフが事前に施設周辺の下見をして、バッタやチョウやトンボ、時にはクワガタなどホンモノの虫をつかまえようとして参加者を屋外に連れて行くものです。



- ☆ 個人でも参加しやすい
- ☆ 解放感や楽しさを得やすい
- ★ 一過性(体験した“だけ”)に陥りやすい

こどもの城の催し例

【図②】

	静的	動的
屋外	●たき火 ●センス・オブ・ワンダー ●絵本の森	●白木峰忍者塾 ●大縄跳び ●虫捕り
屋内	●カプラ ●折紙 ●北欧の切り絵	●こどもの城バンド ●ニュースポーツ（屋内）

よく見られる担当スタッフと子ども（主に男児）との会話です。

「虫捕りに参加する皆さんは集まってください。」

「は～い。あのねえ、ボクねえ、きょう、カブトムシとりたい！」

純粋な子どもたちのカブトムシに対する思いですが、この思いに応えられる場合は、決して多くありません。

実は、多くの場合、子どもたちの足元がスリッパの類なのです。夏季は、こどもの城の戸外で、多良

山系の水を利用した水遊びができるコーナーがあります。水遊びの大好きな子どもたちですから、濡れることを予測してスリッパを履いてきたのでしょう。もちろん、中は裸足です。

一方で、カブトムシなどが好む樹種は、クヌギなどの広葉樹で、その周辺はスリッパで分け入るには、足元が危険な所ばかりです。

虫捕りは、開館の年からずっと提供し続けている催しですが、今年度からは、スタッフも少し対応を変えました。以前は、「う～ん、今日はほかの虫を捕りに行こうね。」と言い、草原でバッタを追いかけて、カブトムシのことを忘れるほど夢中になる子どもたちの姿に満足していました。

しかし、今は違います。

「カブトムシを捕りたいのなら、今度、靴を履いてきた時にしよう。それも、朝早くに。」と語りかけるようにしています。

くり返しますが、活動を提供する基本は、「“楽しませる”でなく、“楽しむ”ことを手伝う」です。この章で扱う催しの類は、手軽に参加できるものであるがゆえに、服装も軽装になりがちです。しかし、主役である参加者自身が用意しなければならないこともあります。子どもたちはもとより、保護者にも、それをハッキリと伝えることにしました。



カプラ



スタッフの手伝いも、子どもには催し

なお、子どもたちへの語りかけは、肯定的・創造的な言い方を心がけています。

「靴を履かないとカブトムシを捕りに行けないよ」

（不可能を伝える言い方）ではなく、

「靴を履いてきたらカブトムシを捕りに行こうね」

（可能性も同時に伝える言い方）です。



カブトムシ？

どうしても、スタッフとカブトムシを捕りに行きたいという子どもたちがいたら、後の章でふれる活動やプログラムとして、カブトムシ捕りの活動を組み込んだプログラムを創造することもできるのです。

また、たまに「今日だけ特別に、何とかありませんか」と食い下がる大人の方もいらっしゃいます。連れて行くことで応えたい気持ちもありますが、生きる力は一朝一夕に身につくものではなく、多くの試行錯誤が必要だと言われます。手軽に、いつでも何でも手に入れることができるように応えるのではなく、「準備をすれば可能になることが増える」と伝えて応えようと思います。

そもそも、ほとんどのカブトムシは、利用者が申し込みをせずに来館できる時間帯には、暑さを避けて地中で眠っているのですが……。



## 第二段階 Educational

この章では、教育的・学習的な内容（自然・環境、異文化理解、コミュニケーションなど）を盛り込んで活動する場合（図③の網掛け部分）のことについてふれます。

### 「来たい！」と「来た！」は似て非なり

この報告書の後半の部分では、月別の来館者の数を紹介するコーナーもあります。開館した年は、特に冬季にどれくらいの利用者が来館されるのか予想できない中でのスタートでした。

もっとも、何人が来館されるのかというのは、一年を通して誰にもわかりません。開館した年には、施設の知名度も高めようと、いくつかのPR的な催しも企画してみました。その中に、「たき火プロジェクト」というのがありました。前章でふれたたき火のほかに、冬季限定で、1日に一家族だけスタッフがついてバーベキューができるというもので、受付時にチラシで紹介しながら参加を呼びかけてみました。

冬季にバーベキューは寒いので、利用者の反応はよくないだろうと、スタッフも予想していました。



フランス料理（要申込み）

ところが、「ええ〜っ、火起こしから全部やってくれるの?」とか、「日程を決めて申し込めばいいですね」とか、「お父さん、これ、いいねえ。やってもらおうよ。」などと、意外にも反応は悪くありませんでした。背景には、毎日の献立を考えるのに苦労しているお母さんたちの実態もあったようです。ましてや、こどもの城に午前〜午後と滞在するには、弁当などの持込が必要になります。食材だけ買い込んで、自然体験と生活体験が一度にできて、スタッフともふれあえて、「もしかしたら、ヒット企画かもしれない」とスタッフは感じ始めていました……。

【図③】

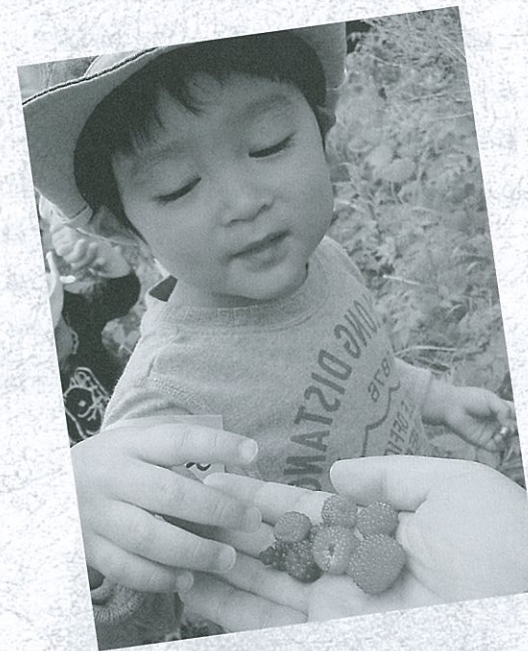
← 申込み不要		申込み・打合せが必要 →	
遊具などで遊ぶ	催しに参加する	事前に申し込んで催しに参加する	事前に打ち合わせてオリジナルの活動を創造する

- ☆ 個人でも参加しやすい
- ☆ 試行錯誤・くり返しの機会になりやすい
- ★ 生活の中で時間の調整が必要
- ★ 天候等により内容の変更や中止の場合がある

い」とスタッフは感じ始めていました……。

ところが、現実には、実行に移したグループは1つだけでした。それも、バーベキューではなく、クリスマス時期だったのでケーキと鍋づくりの内容に変更になりました。あれだけの反応は何だったのかと不思議でしたが、同時に、こどもの城に“来る”という行動に移すまでには、利用者からすれば大きな壁があるのではないかということを思い知らされました。

しかしながら、実行に移したこのグループの活動は、後に、先駆的な事例となりました。このことについては、次の章でふれることとします。



野いちご!



畏敬すべきものへの直観力

### ハマってこそ実になる

こどもの城の受付を通ったら、すぐに書いてある手書きの表示です。「生きる力はお店で売っていません。そのため、こどもの城では、大人も子どもも多くの時間をかけて、たっぷりと試行錯誤するという考え方を大切にしています」と続きます。

図④に示した網掛け部分の催しは、申込みが必要なものです。前章で紹介した催しとの大きな違いは「時間」です。前章で紹介したものは概ね30分程度ですが、ここで紹介している催しは、短くても1時間程度かかるものから丸一日かかるものまであり、中には毎月継続して参加するものもあります。

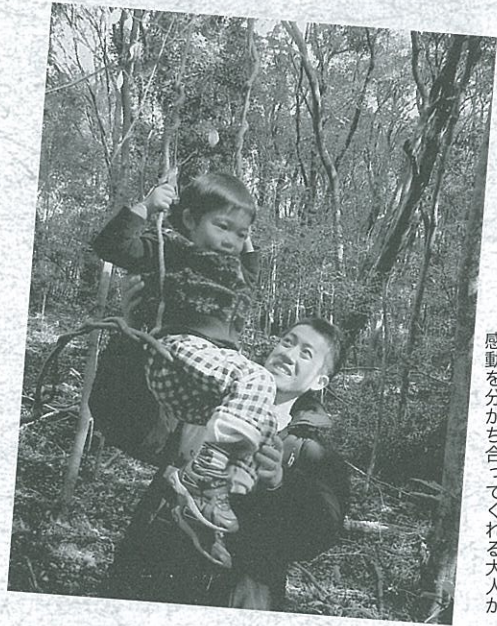
タイトルだけ見ても、英語など学校の学習指導要領等を意識した内容のものも含まれていることが読

### こどもの城の催し例

【図④】

	静的	動的
屋外	●夜の森探検 ●センス・オブ・ワンダー ●森のようちえん	●プロジェクト・アドベンチャー ●アドベンチャー・ワールド
屋内	●伝えるってなあ〜に ●英語であそぼう ●各種クッキング	●10mの壁に挑戦 ●ヤル気の秘訣

み取れることと思います。ただし、学校との大きな違いは「こどもの城にはカリキュラムがない」ということです。あらかじめ決められた内容と時数に基づいて実施しているわけではありません。あくまでも独自の手法で教育内容を意識しています。内容が教育的・学習的であったか否かは、参加者に判断してもらおうと思います。



感動を分かち合ってくれる大人が

### 森のようちえん

北欧の子育てをヒントに、日本でも、官民を問わず、幼児期に子どもたちを森に連れて出かけ、自然体験活動を行う活動が多く展開されています。中でも、「森のようちえん」と題した取組は全国的な研究集会も毎年開催され、情報交換も盛んに行われているようです。諫早市こどもの城でも、同名のタイトルの催しを実施しています。

開館した年から実施しているこの催しは、最初は、申込みの必要がないものとして実施していました。しかし、子どもたちを屋外へ連れ出すには、前章でふれたスリッパの例のように、参加者が準備すべきものもあります。

そこで、事前に参加者と準備すべきものを共有するために、今年度から事前申込み制に変更しました。

実は、参加者数が減ってもしかたないと覚悟していたのですが、これまでの啓発にも効果があったのか、毎回(毎月第三火曜日、ほか各季節の土曜日に1回)、定員を超える申込みがあり、次回の申込みをお願いしている状況です。中には、毎月参加される方もいます。

こういった自然体験活動や環境学習活動の折によく引用され、多くの指導者に影響を与えた有名な本として、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」があります。こどもの城で実施している内容も、レイチェルの考え方にとても近いと感じていますので、作品の中身を少し紹介してみます。

「まだほんの幼いころから子どもを荒々しい自然の中に連れ出し、楽しませるといことは、おそらく、ありきたりな遊ばせ方ではないでしょう。けれども私は、ようやく四歳になったばかりのロジャーとともに、彼が小さな赤ちゃんのときから始めた冒険—自然界への探検—に相変わらず出かけています。そして、この冒険はロジャーにとってもよい影響を与えたようです。私たちは、嵐の日も、おだやかな日も、夜も昼も探検に出かけて行きます。それ



自然からの贈り物

は、何かを教えるためではなく、いっしょに楽しむためなのです。」

「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激に満ち溢れています。残念なことに、私たちの多くは、大人になる前に澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直観力をにぶらせ、あるときは全く失ってしまいます。(中略) 生まれつきそなわっている子どもの『センス・オブ・ワンダー』をいつも新鮮に保ち続けるためには、私たちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、少なくともひとり、そばにいます。」

(以上、新潮社出版「センス・オブ・ワンダー」より、一部こどもの城が漢字変換)

なお、「森のようちえん」は、雷の時は別として、雨が降っても屋外で活動します。参加者が雨具と気持ちは事前に準備してきたから実施可能になるのです。こどもの城は、開館前には「雨の日でも遊べる

ところ」と言われていましたので、屋内で過ごそうとして来館された方は、森のようちえんに参加している方々を見て驚きます。でも、参加された方々は、充実感いっぱいの笑顔で帰ってきます。自然が人間の本能を呼び覚ますかのようです。

似たようなことをレイチェル・カーソンも述べています。

「雨の日は、森を歩きまわるのはうってつけだと、かねてから私は思っていました。(中略) 自然は、ふさぎこんでいるように見える日でも、とっておきの贈りものを子どもたちのために用意しておいてくれます。」



感激、神秘にあふれた冒険



## 第三段階 Development

この章では、団体やグループを対象に、参加型で合意形成をしたり、問題解決をしたり、メンバー間のチームワークを高めたりするために提供しているプログラム（図⑤の網掛け部分）のこについてふれます。



オリジナルの活動

### 共に創るオリジナル活動

こどもの城には、子ども会などの青少年教育団体、PTAなどの社会教育団体、中学校や高等学校の部活動、教師など指導者の団体等から、多くの参加体験型プログラムの実施について依頼があります。（こ

の報告書の後半部分に利用団体の一覧を掲載しています。）

これまでの章でふれた利用方法しか経験のない方は、その事実には驚かれることも多いようです。ましてや、こどもの城を「低年齢児の遊び場」程度にイメージされていた方は、中高生など思春期のプログラムや指導者を対象とした研修まで実施しているとは、思いもよらないようです。

しかし、考えてみてください。こどもの城は諫早市総合計画の土台づくりプロジェクトに位置づけられている事業です。遊び場だけの機能では、もったいないと感じます。会議室、多様な研修ができる多目的室やプレイホール、そして何よりも白木峰の自然を舞台に、“ここでしかできない（ここだからこそできる）”ことを共に創造しようではありませんか。

### ワークショップって

昨年までの報告書でもふれましたが、参加体験型のプログラムのことを一般に「ワークショップ」といいます。あらためて、ワークショップについて少



高校生のワークショップ

し整理してみます。

ワークショップには、いろいろな内容やとらえ方がありますが、構成する3つの要素は、いずれも共通しているようです。

- ・Enjoy (たのしく)
- ・Experiences (たいけんして)
- そして、重要なのが
- ・Each Other (たがいに)

英語にすれば3つの「E」、日本語にすれば3つの「た」が頭文字になることも面白いですね。ここで注目していただきたいのは、「たがいに」です。「ワークショップには先生がいない」などと言われます。そう、ワークショップの先生役は、他ならぬ参加者一人一人なのです。ですから、「こどもの城のワーク

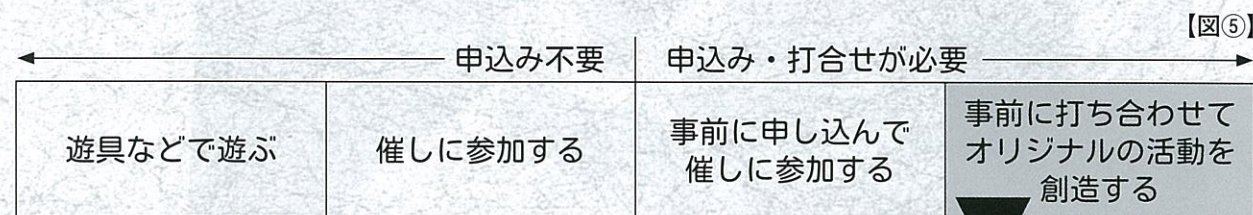
ショップを“受けた”という言い回しは適切ではなく、「こどもの城のワークショップに“参加した”」が適切だと感じます。

もちろん、常に場の状況を把握し、活動を仕掛けて参加者の学びを促進することに努める役割の人（「ファシリテーター」）も存在します。こどもの城でワークショップを実施する際には、ほとんどの場合その役割をスタッフが担当します。ワークショップそのものは、全国のいたるところで実施されていますが、こどもの城のスタッフは、オリジナルな活動も混ぜて場を進行しています（名称のみ図⑥に掲示）。

ちなみに、ワークショップの中で行ういろいろな活動のことは、体験学習のプログラムでは「アクティビティ」と呼ばれることが多いようです。プログラム全体を構成する各活動がアクティビティということになります。

### 孤独な子育てにサヨウナラ

人には、家庭の行事、地域の行事、仕事の行事などがあります。前章で紹介したように、「たき火プロジェクト」の参加者が1グループだったということも、日々の生活の中で、時間の調整がいかに困難であるかを物語っているように感じます。



- ☆ 準備から時間を割いた分の充実感を得やすい
- ☆ 積極的に行動できる機会になりやすい
- ☆ 身のまわりの他者と良好な関係を築く機会になりやすい
- ★ 生活の中で時間の調整が必要
- ★ 体験していない人に話しても伝わりにくい

【図⑥】

### こどもの城のワークショップの中で実施したアクティビティ例

静的	動的
<ul style="list-style-type: none"> <li>●ハングル自己紹介</li> <li>●パロ・インパロ</li> <li>●懐メロ二人組</li> <li>●好きなもの当てて</li> <li>●ミスマッチ</li> <li>●仲良しのなり方</li> <li>●冒険パーティー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●二人組開脚ジャンプ</li> <li>●ダンス・チーム</li> <li>●一肌脱ごうぜ</li> <li>●サッラハー</li> <li>●筑豊の盆踊り</li> </ul>

ここで、行動に移した1グループが先駆的な事例になったことについてふれてみます。

実は、その後、多くのお母さんたちのグループが、スタッフと打ち合わせながら、子育ての情報交換、料理や自主的なレクリエーションなどの活動を通して学ぶという利用形態が増えてきたのです。

当初は、スタッフも「1グループ“しか”実施“しなかった”」というとらえ方しかしていませんでした。しかし、開館して数年経過した今、あらためて大きな軌跡であったと感じています。今は、「1グループ“が”実施“した”(道を拓いてくれた)」ととらえています。

なお、最初のグループのメンバーは以前から知り合いの方々で構成されていましたが、最近のグループは、元々は知らなかった人どうしが、スタッフの仲介で知り合って構成されています。しかも、メンバーは固定しておらず、その日に一旦解散します。つまり、誰でも参加できる仕組みになっているのです。参加者各自には、自分の友だちも多くいるのですが、少しの時間だけでも互いの子どもを預かり合う仲間になっていきます。こうした取組を通じて、



ボランティア養成事業の一コマ  
～ラコタ族に扮して文化を体験しながら、人と自然のつながりを体感し、参加者全員が感動の涙を流した。

心理的に孤独な子育てをしている方が、「信頼できる人たちがいる」ということを感じていただけたらと思っています。

### メールよりもホームページ（掲示板）

誰かが企画し、「実施したい！」と行動を起こした時、スタッフは、メンバー間の連絡を最小限にとどめることを勧めています。多くの方が携帯電話などのメールを使って連絡したり、情報を交換したりしていますが、過度の送受信は負担を招きます。メンバーが増えると連絡ミスも起こりがちです。せっかく、楽しく、体験して、互いに学ぼうとしているのですから、連絡による誤解や疑心暗鬼になることは避けたいところです。「私には連絡をしてくれなかった」などと疑心暗鬼になるのは、ワークショップの企画意図からすれば、本末転倒です。

このようなことを避けるためにも、こどもの城では、メールよりもホームページ（掲示板）型の連絡方法を勧めているのです。言い換えれば、**発信者だけが責任を持つ方法よりも、受信者も責任を担う方**

法です。適応できているか否かは抜きにして、現代社会は情報化が進展しました。ワークショップなどにおいては、経験上、受信者も責任を負う方が、人間関係が円滑になるように感じます。したがって、こどもの城でお母さんたちのワークショップを実施する際は、裏紙に、いつ、どこで実施するかなどの情報を張り出し、参加したい人がそれを見て参加するという方法をとっています。昨年の報告書でもふれましたが、「集める」ではなく、「集まる」を意識しています。

参考までに、こどもの城では、スタッフ間の連絡も同様の方法を活用しています。多くの職場などでは、部下が上司や同僚などへ“ホウレンソウ（報告・連絡・相談）”する場面があると思います。発信者がホウ（報告）、レン（連絡）、ソウ（相談）して情報を共有したり、意思決定したりする方法です。

こどもの城では、この“ホウレンソウ”に加えて、“**シュンギク（旬の話題を聴く）**”を館長が提案しました。現場の責任者にあたる館長自らが受信者として責任を負い、情報の発信や意思決定の提案を共に助ける方法です。こどもの城は、スタッフの勤務日が異なる職場です。情報機器などによる“デジタルな方法”に加え、ホワイトボードやメモ紙などによる“アナログな方法”を選択して勤務日の違いの穴を埋め、効果的な運営方法を試行しています。利用者を中心に据えて運営していますので、他のスタッフに向かって、館長が踏ん返り返って「ホウレンソウがなっていない！」などと言えないのです。

### “落とし穴”にハマらぬために

ワークショップを企画する際の“落とし穴”について少しふれます。“落とし穴”にハマらぬためには、「参加者全員が目的を確認して進めましょう」ということです。

通常、ワークショップは企画した数名が、呼びか

けるメンバーに情報発信します。他の方は、「いつ、どこで、どんなことを」など、ワークショップの手段を知ることになります。

ここでよくあることが、目的を落としてしまうことです。PTAや子ども会など地域の団体では、年間行事が毎年行われ、伝統として引き継がれていることも多いものです。「毎年やっているのだから、皆が、すでにわかっているだろう（わかっているはずだ）」という感覚で実施される場合も多いのではないかと思います。こどもの城では、そうであっても、もう一度目的を確認することから始めます。PTAや子ども会などでは、役員が企画する場合がありますが、今一度、ともに、その“思い”を汲み取る作業から始めます。なぜなら、ワークショップは参加者主体の学びの場だからです。**行事は毎年実施しても、メンバーは毎年異なります。**そして、各々のメンバーは様々な“思い”を抱いているからです。

参考までに、全国のあちこちで「皆さんのPTAの規約にある目的を教えてください」とたずねても、ほとんどの役員さんや校長先生・教頭先生が「おぼえていません」と答えることもふれておきます。デートに喩えると、どこに行くか決めずにドライブすることもあると思いますが、北の佐世保に行くのか南の雲仙に行くのかくらいは、ワークショップを企画する際は確認しましょう。両方行きたい場合は、それなりの時間を確保しましょう。くり返しますが、



課題解決力を目指した職場研修



企画者だけでなく、参加者主体の学びだからです。一人一人の積極的な参加を促すためには、経験上、遠回りのように見えて実は近道であると感じています。

なお、「何でもいいですから、こどもの城で何かやってください。これで私の役員としての役目は終わりますから」という類の思いには応えないようにしています。ちょっと聞くと冷たいように感じられるかもしれませんが、スタッフは「でしたら、皆さんでどこか食事でも行ってみてはどうですか？」と応じます。そして、「本当の思いは何でしょうか。自身でも気づいていないかもしれない、心の奥底の願いは何でしょうか。言葉にならなくてもいいので、聴かせてくださいませんか。」と続けます。

理由は簡単です。表面的な思いに応えると翌年の役員さんに同じ思いを抱かせてしまうかもしれないからです。何でもそうでしょうが、「やらなければ

(長崎弁で“せんば”）」という思いでやる時、人は行動が鈍りがちになります(諫早市PTA母親委員会では、こういう思いを“妖怪せんば”と命名していました)。せめて、ワークショップを企画する時は「やりたい!」という思いから始めたいものですね。



準備段階からプログラムになる



高来町の6年生、1万ピースのカプラ完成!



## 第四段階 Re Development

この章では、事前に企画した活動というよりも、利用者が抱える悩みの対応など(図⑦の網掛け部分)のことについてふれます。



### 愛しているけどイラつく

よく、子育ての本や雑誌に「子育て中の親が抱える悩み」とか、「子育てに追い詰められて」などと書かれています。こどもの城では、利用者の笑顔が絶えないので、本当かなと思ってしまうこともあるのですが……本当でした。

実際に、多くの利用者のお母さんと語ってみると、

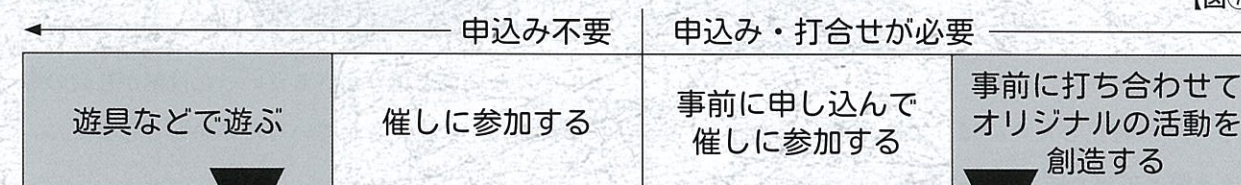
「家に子どもと居たら気が狂いそう」とか、「怒ってばかりで、後で落ち込み自己嫌悪になる」とか、「旦那に心配かけたくないから一人で考え込む」などということが聴かれます。そういった悩み(特に、母親の悩み)を一言で表現したのが、「子どもって、愛しているけどイラつくのよね。」です。子育ての経験のある先輩方が聴かれると、「とんでもない!」と感じられることと思いますが、決して特定の方だけが語るのではないことを紹介しておきます。そして、それを口にしているのが、こどもの城なのです。

こどもの城では、これまでの章で紹介した催しやプログラムの他に、このような悩みを語る利用者への支援をしています。ほとんどの場合、それは予約などなく突発的に発生します。支援といっても、利用者の悩みを聴き、赤ちゃんを抱き、共に泣き、笑うことなのですが……

### “私”に戻る解放感

こういった支援は、なにもこどもの城だけでなく、多くの専門機関でできます。むしろ、こどもの城よりも専門的な助言や支援が可能でしょう。そもそも、世間には〇〇療法士、〇〇カウンセラーといった資

【図⑦】



- ☆ 開館日なら、いつでもできやすい
- ☆ 少しの間、子どもと離れることができる
- ★ 対応するスタッフを指名できないことがある
- ★ スタッフが共に考えるため、解決策は示されないことが多い

- ☆ プログラムそのものが悩みなどの解決を含んだ内容にできる



格が多くありますが、そういった資格を持っているこどもの城スタッフは数名です。確かに、ボランティア養成事業で「カウンセリング研修」を実施していますが、資格をとるためのものではありません。カウンセリング的な対応や活動の提供を心がけるための研修です。そして多くの場合、悩みを語る方々は、すでに専門機関に行っていることが多いのです。

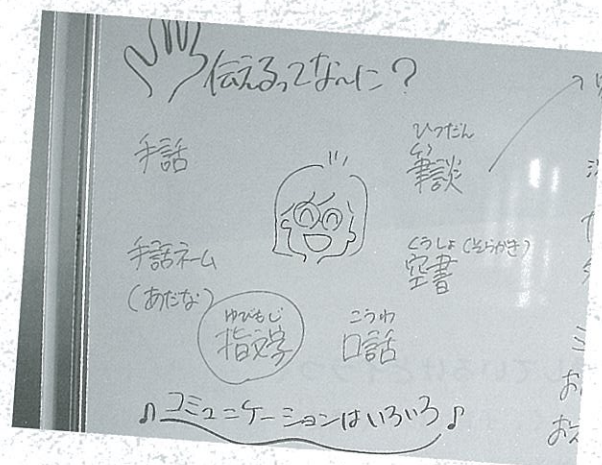
では、なぜ、人々はこどもの城のスタッフに語るのでしょうか。

一つには、こどもの城の特性が考えられます。子どもが自由に活動している間、見守る家族とスタッフが近くにいる、世間話をする人が多いのです。そこから、話題が子育てになり、悩みを打ち明けることに発展していくのです。スタッフは、子どもたちとからみながら共に笑っています。理屈抜きの遊びやふれあいは、子どもたちの表情を生き生きと変えていきます。スタッフはその表情を共有します。その一連の行動こそが、悩みを語るに値する資格のようなものとして考えられているのではないのでしょうか。

もう一つ特記したいのは、この時の悩みを語る方々を喩えて言えば、「私」に戻っているかのようです。こどもの城では、スタッフが職員としてではなく、一人の人として向き合うように、母親も一人の人、一人の女性としてスタッフに向き合っているかのようです。母親の場合は、よく「〇〇ちゃんママ」

などと呼ばれることがあります。その呼ばれ方は、あくまでも母親なのです。「私（自分）」に戻ったと言うと、理解しがたい感じがするかもしれませんが、それだけ、乳幼児の母親が子どもと離れずに、「母親」として生活しているという実態の表れかもしれません。中には、堰を切ったように語る方もおられ、何の解決策も探っていないのに、「聴いてもらっただけでよかった」と解放感いっぱい語られる方も少なくないのです。

このことは、例えば中高生などを対象として、事前に申し込んで実施するプログラムの中でも時々見られることです。



### 伝わるのは……

こうした対応を通して伝わるのは、専門的な助言でもなく、ましてや最善の解決策でもありません。伝わるのは、「あなたのことをいっしょに考える人がいるんだよ」ということです。かつては、地域の中にカウンセリング的な役割をしてくれる他者がいたのではないのでしょうか。こういった役割が社会の中で専門化・分業化されていったのかもしれませんが。

しかしながら、こどもの城での語り合いを考えると、どんなに社会が変化しても、あらためて、子育て中の親（特に母親）に、身近な人の関与の大切さを感じずにはいられません。

なにも専門的でなくても、元来、人には「いっしょに考えられるよ」という伝える力があるのではないのでしょうか。そう信じているからこそ、スタッフは利用者に関わるのです。

事実、スタッフが歌を唄うことで、家に帰って口ずさみ、発達障害の子の言語力が格段に伸びて医者に褒められたという事例があります。体調不良が続いていた子どもが、母親の元気な表情が多く見られるようになってから、健康になった事例もあります。妊娠中の母親がスタッフのバカ話で不安を吹き飛ばした事例もあります。「こどもの城は医療を超える」

と語った家族が5件あります。こどもの城が医療を超えることはありませんが、そう感じた家族にとっては、こどもの城で展開される遊びやふれあいは、食事や睡眠のように、生きていくために必要なものなのかもしれないということを再発見したのではないのでしょうか。

こどもの城は、今後も寄り添い続けます。

子ども一人育てるには、村じゅうの人が必要

～アフリカの諺



カウンセリング研修の一コマ  
～他者とふれあうゲームを通して対人関係について考える。  
ボランティアに混じって、お母さんたちのグループも参加した。

# 利用状況

総利用者数 355,179人

平成23年3月～平成24年2月利用者数 109,814人

## ◆月別利用者数

	平成23年度
3月	11,179人
4月	8,252人
5月	11,219人
6月	8,416人
7月	9,828人
8月	13,979人
9月	10,186人
10月	10,768人
11月	8,637人
12月	4,526人
1月	6,532人
2月	6,292人

## 1 利用者層の傾向

- ・市外の幼稚園・保育所のバス遠足などの立ち寄り利用は、平成22年度の42団体から47団体に微増している。(雨の場合のみ利用したいという連絡は多数ある)
- ・平日は、母親と乳幼児(1人～2人)連れの利用者が多く、特に子育ての悩みを抱える母親の利用が増加し、複数のサークル化が見られた。
- ・日曜日は、平日や土曜日と比較して父親の利用も多く、積極的に我が子や他人の子とふれあう父親が少しずつ増えてきた。
- ・土曜日や日曜日(特に、午後)は、諫早市外の利用者が多い。
- ・平日は、小学生はほとんど来ない。
- ・利用のきっかけで際立って多いのは、口コミである。

なお、利用者層は、これまでと変わらず、【表1】のような傾向にある。

【表1】

	乳児	幼児	小学生	保護者	祖父母
平日	◎	○	—	◎	△
土日祝日	○	◎	◎	◎	○
お盆・正月	○	◎	◎	◎	◎

記号(割合が、◎とても多い、○多い、△普通、—少ない)

## 2 複数回利用者(リピーター)の傾向

- ・複数回利用者(リピーター)は、9割超を占める。
- ・約20家族が、毎週利用される。
- ・複数回利用者(リピーター)には、職員とのふれあいを求めて来られる乳幼児と母親が多く、一番の利用目的になっている。

## 3 時間帯別入館傾向

- ・時間帯別入館傾向は、下記【表2】のような状況にあり、特に冬季の土日においては、早い時間帯の来館が少ない傾向が見られた。
- ・早い時間帯の来館を奨励するため、土日祝日の開館直後に人気メニューの「10mの壁にチャレンジ」を20人限定で実施しているが、11月末までは開館前から利用者が並んでいる傾向が見られた。

【表2】

時間帯	平日割合		土日割合	
	夏季(8月)	冬季(12月)	夏季(8月)	冬季(12月)
9:00～10:00	7%	10%	9%	4%
10:00～11:00	24%	14%	15%	11%
11:00～12:00	17%	19%	18%	16%
12:00～13:00	21%	36%	16%	16%
13:00～14:00	16%	4%	18%	17%
14:00～15:00	9%	9%	16%	21%
15:00～16:00	5%	4%	7%	12%
16:00～17:00	1%	4%	1%	3%

\*小数点以下四捨五入

## 4 傷病等の様子

- (ア) 救護室で処置をした件数 20件  
(一時休養、打撲、擦過傷、虫刺され等)
- (イ) 医療機関への搬送または後日受診件数 9件

# ボランティアの活動状況

のべ活動人数 (平成23年度) 440人

リスクマネジメント研修受講者数 90人

※2月末現在

ボランティア活動の共通認識  
～できる人が、できるときに、できることを～

## 1 ボランティアの活動内容

- ①プレイリーダー的な活動
- ②インストラクター的な活動
- ③その他、環境整備などの活動

## 2 ボランティア等養成事業の実績と予定

- ◆平成23年4月22日(金)、5月20日(金)ほか  
安全に関する研修(リスクマネジメント研修)  
講師：こどもの城スタッフ
- ◆平成23年7月9日(土)  
普通救命救急講習  
講師：諫早消防署
- ◆平成23年11月26日(土)～27日(日)  
体験活動を支援する研修(ファシリテーション研修)  
講師：松木 正(環境教育事務所マザーアースエデュケーション代表)  
大島 一(環境教育事務所マザーアースエデュケーションスタッフ)
- ◆平成24年1月21日(土)～22日(日)  
カウンセリング研修  
講師：難波克己(玉川大学心の教育実践センター主任代理)
- ◆平成24年2月11日(土)～12日(日)  
企画研修  
講師：こどもの城スタッフ
- ◆平成24年3月24日(土)  
周辺自然環境研修  
講師：宮崎正隆(諫早自然保護協会理事)

## 3 ボランティア交流会参加報告

- 目的：①同様の大型児童館どうしの情報を共有し、相互理解する。  
②遊びなどのプログラムを通じて、子どもたちの健全育成に寄与するボランティア活動を広く周知する。  
③ボランティアどうしの交流を深める。  
④質の高い活動を提供する。

期 日：平成23年10月15日(土)～16日(日)

場 所：神戸市総合児童センター(こべっこランド)

主 催：財団法人 児童育成協会(青山・こどもの城)

参 加 者：ボランティア 佐々木三紀子

専門員 野中邦浩(同行)

参加施設：青山こどもの城(スタッフ1名、ボランティア 5名)

えひめこどもの城(スタッフ1名、ボランティア 5名)

こべっこランド(スタッフ2名、ボランティア 20名)

諫早市こどもの城(スタッフ1名、ボランティア 1名)

内 容：15日(土)

自己紹介

アイスブレイクゲーム

各館紹介・郷土料理作り

討論会 テーマ①「ボランティアとは？」

②「対応に困った子どもの行動」

③「各館の活動形態」

④「子どもと接していて感じたこと」

16日(日)

各館提供ブースの準備

「チャレンジゲーム」(諫早のブース)実施

### 参加したボランティア・佐々木さんの感想

- ・とても刺激になり、あらためて諫早の良さを感じることができた。自分のこれまでの活動に自信が持てたし、参考にできることも多々あった。
- ・このような機会は個人ではなかなか得ることができず、声かけしていただき非常にありがたかったと感じている。

### 各館からの諫早市こどもの城に対する感想

- ・運営の考え方にブレがなく、すごいと感じた。
- ・諫早の人から、子どもとの接し方を学んだ。
- ・佐々木さんからボランティア精神を学んだ。
- ・ボランティア研修の講師に来てほしい。(愛媛から、その後依頼あり)
- ・実際に諫早の現場を見たく、具体的に計画したい。

# 申込み団体一覧

利用日	団体名
<b>◆保育園等</b>	
3月12日	キッズスクール保育園
4月8日	サンタの家保育園
5月10日	みどり保育園
5月12日	井崎保育園
5月28日	キッズスクール保育園
6月10日	ともしび保育園
10月25日	深山保育園
<b>◆幼稚園</b>	
3月4日	山美幼稚園
5月26日	不二幼稚園
6月24日	諫早清水幼稚園
9月21日	諫早幼稚園
<b>◆学童保育</b>	
8月17日	湯江小学童クラブ
<b>◆子育てサークル・センター等</b>	
3月10日	さくらんぼ会
3月10日	おとなの城
4月3日	かんとろうとゆかいな仲間たち
4月7日	さくらんぼ会
4月16日	もんもんクラブ
5月12日	有喜公民館子育てサークル
5月13日	おとなの城
5月20日	おとなの城
6月2日	おとなの城
6月13日	もんもんクラブ事前研修
6月15日	もんもんクラブ
6月16日	おとなの城
7月7日	おとなの城
9月1日	もんもんクラブ
9月4日	子育てサロンぞうさんクラブ(多良見)
9月8日	有喜公民館子育てサークル(出前)
10月15日	カイト君とおともだち
10月20日	自家製クラブ
11月17日	自家製クラブ
11月29日	自家製クラブ
12月3日	サークルちはる
12月10日	子育てサークルTOMOKO
12月15日	自家製クラブ
12月22日	さくらんぼ会
12月27日	サークルやまぐち
1月14日	自家製クラブ
1月21日	トトロの森!!
2月25日	自家製クラブ
<b>◆PTA</b>	
3月5日	湯江小学校3年2組PTA
5月10日	諫早市PTA連合会母親委員会
5月14日	諫早中学校剣道部保護者
6月6日	上諫早小学校1年生事前研修(出前)
6月11日	小野小学校3年2組PTA
6月11日	上諫早小学校1年生PTA
6月15日	長田小学校3年生事前研修(出前)

利用日	団体名
<b>◆PTA</b>	
6月25日	長里小学校4年生PTA
6月25日	長田小学校3年生PTA
7月16日	喜々津東小学校4年生PTA
7月28日	諫早市PTA連合会母親委員会
8月17日	西諫早小学校6年1組PTA(出前)
8月21日	北諫早小学校5年2組PTA
9月17日	本野小学校5年生PTA
10月23日	西諫早小学校4年3組PTA
11月5日	上山小学校1年生児童
11月5日	上山小学校1年生PTA
11月6日	真崎小学校1年生児童
11月6日	真崎小学校1年生PTA
11月11日	真津山小学校PTA教養部(出前)
11月12日	大草小学校2年生PTA
11月29日	北諫早幼稚園PTA(出前)
1月14日	諫早幼稚園そら組PTA
1月26日	真津山小学校5年生PTA(出前)
2月18日	真津山小学校5年生児童
2月18日	真津山小学校5年生PTA
2月19日	湯江小学校6年生児童
2月19日	湯江小学校6年生PTA
<b>◆学校</b>	
3月5日	諫早東特別支援学校 自主学習
3月9日	諫早東特別支援学校 中学部1年生
3月11日	真崎小学校6年生
3月17日	諫早東特別支援学校職員研修
3月27日	北諫早中学校テニス部
3月28日	北諫早中学校テニス部
4月12日	長崎日本大学中学校1年生
5月7日	北諫早中学校吹奏楽部
5月8日	北諫早中学校吹奏楽部
5月13日	諫早東特別支援学校小学部
5月14日	諫早中学校剣道部
5月19日	諫早特別支援学校中学部
5月25日	諫早特別支援学校6年生
5月29日	森山中学校女子テニス部
5月30日	諫早高等学校ソフトボール部
6月2日	川棚特別支援学校
6月8日	創成館高等学校1年生事前研修(出前)
6月13日	大村城南高等学校(出前)
6月17日	西陵高等学校(出前)
6月17日	諫早特別支援学校小学部1年生
6月22日	創成館高等学校1年生(出前)
6月22日	諫早高等学校野球部
6月23日	創成館高等学校1年生(出前)
7月28日	小野小学校職員研修(出前)
8月10日	諫早市教育研究会生活総合部会
8月20日	希望が丘高等特別支援学校1年4組PTA
8月23日	諫早中学校ソフトテニス部女子
10月3日	活水女子大学こども学科1年生(出前)
10月6日	諫早特別支援学校小学部4年
10月7日	諫早特別支援学校小学部2年
10月8日	北諫早中学校吹奏楽部
10月22日	活水女子大学こども学科1年生

利用日	団体名
<b>◆学校</b>	
10月24日	活水女子大学こども学科1年生(出前)
11月8日	虹の原特別支援学校小学部
11月16日	諫早特別支援学校小学部3年生・5年生
11月16日	湯江小学校人権学習(出前)
11月22日	西諫早小学校2年生
12月8日	長里小学校人権学習(出前)
12月26日	森山中学校職員研修(出前)
1月10日	諫早東特別支援学校(出前)
1月10日	長崎ウエスレヤン大学経済政策学科事前研修(出前)
1月15日	長崎ウエスレヤン大学経済政策学科
<b>◆青少年団体等</b>	
3月19日	ICH英語教室
3月26日	企画研修
3月27日	企画研修
3月27日	諫早国際交流センター
4月3日	ガールスカウト長崎県第1団
4月22日	ボランティア研修(リスクマネジメント研修)
5月18日	諫早市少年センター
5月20日	ボランティア研修(リスクマネジメント研修)
6月30日	諫早青年会議所共育委員会
7月9日	ボランティア研修(普通救命救急講習)
7月9日	多良見団地子ども会
7月17日	福田町県住子ども会事前研修
7月23日	サークル「ヒロ」
7月27日	栄田町すなお子ども会事前研修
7月28日	堂崎第一自治会
7月31日	福田町県住子ども会
8月5日	小野町風の子子ども会
8月5日	北諫早少年剣道会
8月6日	森山甚兵衛子ども会
8月7日	栄田町すなお子ども会
8月20日	多良見東西子ども会
8月24日	PUMAクラブ
8月25日	多良見団地子ども会
8月26日	九州アドベンチャー教育研究会
8月30日	長崎県社会福祉青年経営者会
9月3日	ながさきココメサ
9月4日	ながさきココメサ
9月7日	諫早市少年センター
9月18日	高来町青少年健全育成会
9月19日	高来町青少年健全育成会
9月28日	白岩町こども王国
10月2日	成和学生会
11月23日	白岩南部子ども会事前研修
11月26日	ボランティア研修(ファシリテーション研修)
11月27日	ボランティア研修(ファシリテーション研修)
11月27日	グループネッサンス
12月7日	諫早市少年センター
12月10日	白岩南部子ども会
1月21日	ボランティア研修(カウンセリング研修)
1月22日	ボランティア研修(カウンセリング研修)
1月28日	長崎県青年団連合会(出前)
1月29日	長崎県青年団連合会
2月11日	ボランティア研修(企画研修)

利用日	団体名
<b>◆青少年団体等</b>	
2月12日	ボランティア研修(企画研修)
<b>◆その他</b>	
4月6日	諫早市新規採用職員研修
4月24日	ボランティアのつどい
4月27日	デイサービスなかやまレクリエーションクラブ
5月17日	小野公民館
6月10日	中央公民館
7月26日	飯盛公民館
7月29日	高来公民館
8月4日	平和を考えるつどい
8月20日	久山台自治会(出前)
8月27日	長田町自治会(出前)
10月7日	諫早市新規採用職員研修
10月10日	諫早国際交流センター
10月19日	諫早青年会議所次世代共育委員会
11月10日	諫早療育センター
11月11日	諫早療育センター
11月15日	長崎県女性議員の会
1月19日	諫早市子育てサポーター養成事業(出前)
<b>◆実習受入れ</b>	
8月23日~26日	教員10年研修(諫早特別支援学校、1名)
8月24日	インターンシップ(長崎ウエスレヤン大学、1名)
10月30日~	長崎大学
<b>◆行政等視察受入れ</b>	
5月17日	東京諫早会
6月28日	佐賀県黒髪少年自然の家
9月29日	山形県神室少年自然の家
10月1日	広島市竹屋民生委員
10月28日	対馬いづはら病院
12月10日	小値賀子育てサークルぴよぴよ
1月27日	出雲市・津山市議会
1月31日	県下13市議会事務局
<b>◆講師派遣</b>	
6月6日	長崎県男女共同参画推進センター
6月7日	長崎県教育センター
6月25日	北九州教育事務所
7月2日~3日	国立岩手山青少年交流の家
9月22日	佐世保市幼稚園PTA連合会
10月15日~16日	神戸こべっランド(青山こどもの城)
10月19日	小浜高等学校
10月29日	久留米アドベンチャー実行委員会
11月21日~22日	小値賀子育てサークルぴよぴよ
12月11日	福岡県立少年自然の家「玄海の家」
12月13日	多久市児童館
12月15日	東彼杵郡PTA連合会
12月16日	筑豊教育事務所
1月23日	愛媛こどもの城
1月29日	久留米市教育委員会
2月24日	福岡県立社会教育総合センター

